

秋季総体大阪大会

(10/10・11 長居第二) RESULTS

<男子の部>

3年100m 大前 12:04 (+0.3)

2年200m 小森 24:76 (+0.3) <準決勝> 24:25 (+0.6)

2年3000m 荒木 9:35:38 <決勝> 9:43:33

3年3000m 島口 9:05:82 <決勝> 8:58:02 1位

2年110mYH 中司 17:24 (-0.4) <準決勝> 18:40 (-1.8)

3年110mYH 堀本 15:14 (+0.1) <準決勝> 15:44 (-0.2)

<決勝> 15:30 (-2.1) 7位

共通4×100mR (大前・神原・塩見・小森) DQ3→4 *Rc

2・3年三段跳び 塩見 12m78 (+0.5) <決勝> 13m22 (0) 1位

3年砲丸投げ(5kg) 天野裕 NM

2年円盤投げ(1.5kg) 北村 NM

<女子の部>

2年100m 三瓶 13:81 (-0.8) <準決勝> 13:66 (-0.9)

3年100m 山本光 13:03 (+0.2) <準決勝> 13:10 (-0.5)

2年200m 小澤 28:54 (+0.1)

1年800m 金澤 2:30:39 <決勝> 2:30:15 7位

2年800m 鈴木 2:31:06

2・3年1500m 木下 5:03:16

3年100mJH 亀澤 15:82 (+0.5) <準決勝> 15:73 (-0.4)

共通4×100mR (亀澤・山本光・西尾・畑田) 50:82

<決勝> (亀澤・山本光・西尾・畑田) 51:09 1位

1年走り高跳び 川村 1m40 2位

2・3年走り高跳び 沖村 1m40

2年走り幅跳び 堀 4m32 (+1.0)

3年走り幅跳び 畑田 4m87 (-0.9)

2年砲丸投げ(2.7kg) 村上 11m01 <決勝> 11m35

3年砲丸投げ(4kg) 酒井 8m50

2年円盤投げ(1kg) 橋 21m49

【男子総合の部】

1位 咲くやこの花 37点 2位 枚方二 16点 3位 平田 14点

4位 新北野 13点 5位 田尻 13点 6位 茨木西 13点

7位 東雲 12点 7位 枚方一 12点

【女子総合の部】

1位 咲くやこの花 33点 2位 東我孫子 21点 3位 松虫 14点

4位 箕面六 13点 5位 美原 13点 6位 高槻二 13点

7位 豊中三 12点 8位 青山台 12点 (9位 東雲 11点)

【男女総合の部】

1位 咲くやこの花 70点 2位 東我孫子 32点 3位 茨木西 24点

4位 東雲 23点 5位 平田 20点 6位 楠葉西 20点

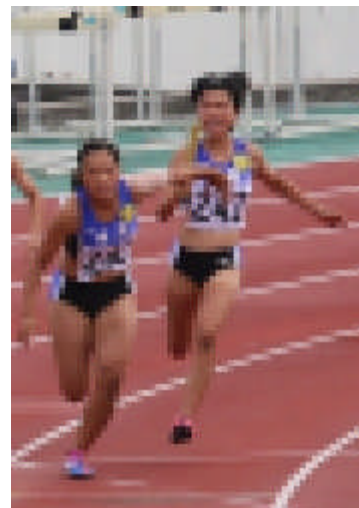
7位 田尻 19点 8位 豊中三 19点

秋季総体大阪大会を振り返って

○ 大阪のチャンピオンを決める中体連の大会が年間に3試合ある。今大会の総体と夏の通信大会と選手権大会。通信大会は個人選手権として位置づけられた大会であるが、夏の中学選手権と秋の総体は学校対校戦となっている。すなわち、各種目の大阪ナンバーワンアスリートが決まるとともに、陸上競技ナンバーワンチームを決める大会となる。トラックシーズンの総決算とも言えるこの大会に、過去東雲は男子総合優勝1回、準優勝1回、女子総合優勝2回、準優勝3回、男女総合優勝2回という成績を残している。2009年以降、咲くやこの花の独壇場となる時代が続いているが10年には咲くやこの花との接戦を2点差でしのぐ30点で総合優勝。11年は36点、12年は26点と健闘しながら、咲くやこの花には及ばず準優勝…。

前置きが長くなった。歴代の先輩たちは、まったく君たちと同じ条件、すなわち体育大会の2日後にこの総体を戦い抜いて結果を残した。「体育大会が直前にあって、ほとんど練習ができていない」という言い訳は一切必要なし。競技者の前に中学生であるのだから、それぞれの事情があって当然。年間予定が判明する年度当初から、この日程がわかっているのだから、そこから逆算して、この大会に向けてどのような流れで練習に取り組みばいいかを考えて実践していくべきである。練習時間が完全に保障されているとすれば、それはプロスポーツ。君たちはアマチュアのスポーツマンなのです。

○ 秋風が染みる大会2日目最終種目。共通女子4×100mリレー決勝。大阪大会のフィナーレを飾るこの場面に毎回のように東雲ブルーのセパレートユニフォームの選手がいる。全国切符のかかる夏の選手権大会と違って感慨深い思いでその時を迎えた。49秒51の記録を持つ東雲リレーチームであるが、不安要素だらけでこの大会を迎えることとなった。一番大きいのが、不動の第3走者の西尾がハムストリングスの炎症で、この1ヶ月ほとんど走れていな



い状態。2年生の小澤を第3走者に起用する方針で、1週間前の万博競技場でも小澤を使ってバトン練習をしていたくらいだ。予選から西尾を起用すると決断したのが前日の大会初日の朝練習。西尾の走りそのものの動きがもどりつつあったと判断したのだが、果たして2本の質の高いレースを走れるかどうかは疑問であった。それでも、最後はここまで苦楽をともにしてきた4人で走らせた。たとえどんな結果になったとしても受け止めることができるはずと考えたのだ。予選のレースでは、4人ともいつものキレではない印象を受けたが、50秒82の記録で難なく決勝進出を決めた。記録的には上出来であると感じた。この1年間東雲のリレメンの誇りを持って戦い抜いた選手が、最高の舞台で最後のバトンをつなげることができることに感謝した。

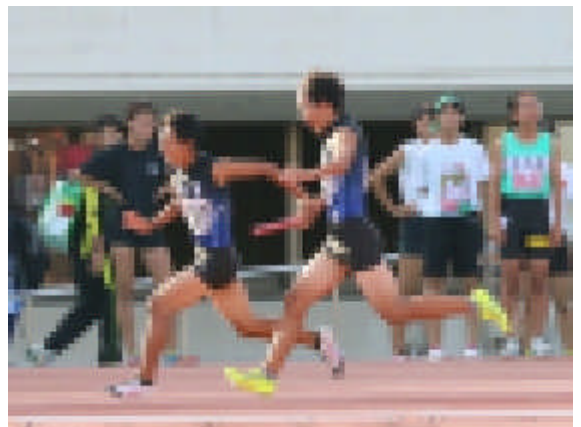
6レーンに東雲。5レーンに松虫、予選トップの50秒62で走った豊中三が4レーン、7レーンには2年生だけで51秒10の記録を叩き出した美原。2レーンにも地区大会でいつものぎを削り合った青山台。優勝候補筆頭の咲くやこの花、東雲とほぼ同等の力を持つ養精がバトン落下でまさかの予選落ち、さらには好敵手の河南も主力のケガで予選から棄権している。それでも、近畿大会低学年優勝メンバーがシフトしてきた豊中三が最大の強敵となり、優勝することは容易ではない。今まで数々のきびしい勝負を乗り越えてきた彼女たちの経験値こそが、今や一番の力になってくれるはずとの思いでレースを見守った。スターターのピストルで大阪のチャンピオンチームを目指して8人の第1走者がいっせいに飛び出した。ここで亀澤が予選以上の素晴らしい走りを見せた。「よっしゃー」と、心の中でガッツポーズ。ところが、好事魔多し（こうじまおおし：いいことやめでたいことには、思いがけずに良くないことが起こりやすいこと）。第2走者の山本光菜里とのバトンが間延びしてしまう。ここで光菜里が減速。光菜里の左手は、教えこんだとおりにプシないでトラブルは最小限にとどまった。そこから光菜里が予選とは人が変わったようにバックストレートを疾走する。トップで第3走者の西尾へバトンが渡る。西尾がこの1年間の思いを胸に気力の走り。現状の中で持てる力を絞り出した殊勲の走り。第4コーナーのバトンゾーンへ4チームほどが横一線に飛びこんでいった。やや待ってスタートを切った第4走者の畑田。先頭ではないが、横一線のままで、まだどこが勝つかわからない状態。「ここまで来たら必ずやってくれるはず…。」その思いのままにホームストレートの30m過ぎから畑田が前に出る。そのままぐんぐんスピードを上げて畑田が1着でフィニッシュ。51秒09。2着に豊中三で51秒46。そして3着には美原が入り51秒53。2015年シーズン最後の大阪リレー決戦で見事に東雲が優勝したのである。



感動の表彰式。笑顔満面の4人が今年初めて表彰台のトップに立った。「この1年間、自分たちの夢に向かってよくがんばりましたね」と、陸上の神様のご褒美にくださった優勝なのかも知れない。東雲のリレーチームはこの11年間で全国大会に4回、近畿大会に8回出場することができたチームである。その伝統に恥じない素晴らしいメンバーでなかったか。この表彰式で解散になってしまうのが惜しいくらいです。今回の優勝をきっと自分たちのことのように歴代の先輩たちも喜んでくれることでしょう。おめでとう。そして、ありがとう。



- 大会初日。15時00分競技開始、2・3年男子三段跳び決勝。太陽が傾いてやや肌寒く感じる、バックストレート側のピット。午前中の予選ラウンドを突破した19名の選手の中に、予定どおり塩見がいた。彼の目標は決勝ラウンドに進むことでもなく、ベスト8でもなく、上位入賞でもなく、「優勝」その2文字しかなかったはずだ。1回目からその揺るぎない決意の跳躍を見せた。ただひとりの13m越え。13m05、風は無風。彼自身初ともなる13m越えの自己ベスト更新。これで、完全にこの戦いの主導権を握ったはずだ。結局、19名が3回の跳躍を終えてもただひとりの13m台。2位は咲くやこの花の選手で12m90。ベスト8が発表されて、彼の試技順は当然最後の8番目。ここから彼がまたひとつ大きく進化していることを証明して見せた。4回目も13m04(+0.4)、5回目13m06(0)やがて、6回目に移る。7番目の跳躍者咲くやこの花の選手が13m02の大ジャンプを見せたが、ここで塩見の大阪大会初優勝が決まる。それでも、彼は6回目の最後の跳躍に集中する。スピードの乗った助走からドンピシャの踏み切り、「ホップ」「ステップ」と、きれいに接地が決まって、最後の「ジャンプ」が大きく伸びた。審判が白旗を掲げる。13m22。風は無風。最後の最後、また大きく自己記録を更新して初優勝に大きな花を添えた。結局、13m台の記録は2人だけ。その戦いの中で彼の有効跳躍4回すべてが13m越えという圧勝ぶりであった。1年生のときはまったくの無名選手。2年生のときも大阪大会で入賞したことは一度もない。そんな選手がつくりあげたドでかいストーリーに、東雲の選手、そして指導者にたくさんの勇気を与えた。そのインパクトに感動でいっぱいになったのである。



○ 「このレースの一番の目標は勝つことだ」大会2日目、3年男子3000m決勝レース前に、島口に念を押した。本音で言えば、2週間後のジュニアオリンピックの予選突破を狙い、ハイペースのレース展開で粘りのある走りをさせたかったが、実際に記録よりも勝つことに重点を置くことが陸上競技の本筋でもある。スターターの号砲で前日の予選を勝ち抜いた18人の選手がきれいに飛び出していった。集団がひと固まりになっているので、スローペースの展開。島口は集団の後方、最後尾から2番目の位置に推移していた。1000mの通過も3分を越えた。互いにけん制しあうレースとなった。このスローな展開を嫌った選手が時折1周72秒（1km3分ペース）にまであげるが、そのペースが上がりきらない。島口は依然と集団の最後尾近くを走っている。「調子が悪いんだろうか？」と、こちらまで不安になった。2000mの通過が6分06秒。記録がのぞめないペース。島口は6分07から08秒あたりか。完全に誰が真っ先にゴールするかという勝負に徹したレースとなった。依然として集団のペースの上げ下げが激しく消耗戦となった。ひとり、ふたりと集団から離れていく選手もいたが10人ほどの集団が崩れない。この10人ほどの選手たち全員に優勝のチャンスがあることになる。ラスト1周の鐘が鳴る前、ラスト420mくらいで島口がロングスパートをかけた。そのスピードの切り替えに場内が騒然となった。あっという間に先頭に躍り出ると、あとは一人旅。信じられないスピードで走り抜けて圧勝。8分58秒02。前回のジュニアオリンピック挑戦記録会の時と同じようにラストの1000mを2分51秒で走ったことになる。「先生、島口くんはラスト1周の400mを57秒で走っていませんか？」と、他の指導者もあきれ顔。（後にビデオで確認した島口は「59秒くらいでしたよ」と苦笑いしていたが、2580mから2980mまでの400mでは57秒台であったかも知れない）まさに、大阪中体連陸上史に残る信じられないスパートであった。2週間後のジュニアオリンピック、さらには駅伝に向けて期待がふくらむ大きな結果を残したのである。



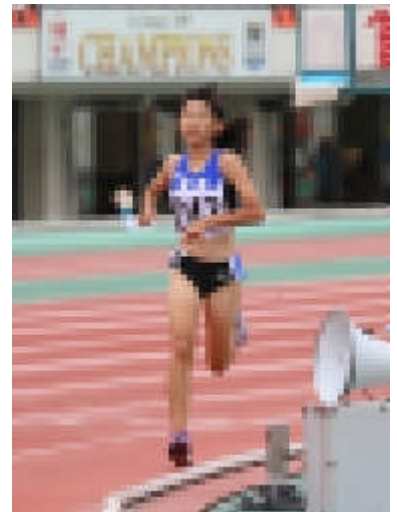
○ 大会2日めの昼前にアナウンサーが「第1曲走路内側、走り高跳びピットにご注目ください。9時30分競技開始の1年女子走り高跳び決勝。ただいま、バーの高さが1m45にまであがっています。この高さに挑戦する選手は3名。東雲の川村さん、…」と紹介した。何とこの時点で、川村の表彰台が決定したことになる。川村の自己記録は1m30。その記録よりも15cm高いバーに挑戦することになったのだから、さすがにまともな跳躍にならなかった印象であった。ところが3人ともこの高さに失敗。ひとりの選手では無効試技の×の数が多かったために、川村と熊取北の選手はその×も同数であったために優勝決定戦となった。バーの高さは1m43に下がり、先にこの高さを跳

んだ方が優勝となる。結局、審判の赤旗と白旗が勢い良く交差して審判が一礼。遠くからでも競技が終了したことがわかった。残念ながら、川村は2位。それでも大健闘である。よくやったと思います。ハードルも得意な選手で体格にも恵まれている。将来、四種競技で大活躍できる選手と楽しみにしている。



- 大会2日目、最終種目のリレーの前におこなわれた1年女子800m決勝。予選を勝ち抜いた8人のまだまだあどけない表情の選手が集まった。3レーンに金澤。予選2組をトップで走って堂々のファイナリストになったのは立派である。積極的なレース展開を得意とする選手で、この決勝レースでも攻めの入りをした。ブレークゾーンからオープンコースになってバックストレートへ。先頭集団の3人に何とか食らいつつ走りを見せた。みんな同じ条件であるが、この年齢で1日2本のレースはかならずダメージがある。ラスト1週の鐘がなって、さらにスピードをあげようとするが、思うように前にすすまない。6位入賞の1点狙いの走りをするなら、ここで自重する手もあったが、彼女はそれを選ばなかった。もちろん、自分も納得済みである。最後のホームストレートでまたひとり抜かれ、最後は7位でフィニッシュ。2分30秒15の記録は、彼女にとっては平凡な記録になるかも知れないが、決勝レースを攻めて走ることができたことが収穫となった。駅伝・ロードシーズンでの活躍も楽しみである。

- 大会2日目、110mYH準決勝。堀本の走りを見て「あれ？」と思った。アプローチそのものに問題はなかったが、中盤からスピードに乗れなくなってしまったのだ。結局、着どりの2着を逃す3着。記録も15秒44。向かい風0.2m。「途中で隣の選手の手が当たりました」と、堀本。この説明に合点がいった。ハードル競技にはまれに、こういうアクシデントがあるもので、隣の選手のディップの際の引き手が当たったのである。ルール上リード足と抜き足が自分のレーンのハードルの板の上を通過していれば、接触があっても失格にはならない。不運である。それでも、陸上の神様はプラスの2番目、つまり8人目の選手として彼を決勝レースの舞台へと送ってくださったのである。



迎えた決勝。2レーンを走る堀本の動きは悪くない。いいリズムで走ってはいたが、今度は強い向かい風に記録を阻まれることになった。15秒30で7位。向かい風2.1m。みんな同じ条件で走ったのだから言い訳はできない。ただ、夏の全中出場はできたものの、この1年間いい流れに乗って攻めのレースをやり切れなかったイメージで終わってしまった。彼なりに期することもあっただろうし、彼の実力はこんなものではない。もう一度、体を作り直して大きく飛躍して欲しい。この1年間苦しんだけれど、決して遠回りしたわけではないはずだ。

- 3年生にとっては引退試合となる。決勝進出を目論んだ男子4×100mリレーが3走の塩見と4走の小森のあいだで、ブルーゾーンでバトンが渡って失格。初歩的なミスによる予選敗退は、悔やんでも悔やみきれない結果となった。女子走り高跳びの沖村、女子砲丸投げの酒井も平凡な記録で終わってしまったが、直前の練習不足が大きな原因となったことは否定できない。ここまで、何とかやり繰りして頑張ってきたこともわかっただけに、とにかくいい結果を残させたいと思っていたのだが、やはり陸上競技は甘くない。一番の誤算は2年女子砲丸投げの村上。彼女のベスト記録12m45からすれば、表彰台も十分視野に入っていたが、彼女も直前の練習不足。足止め材の枠の上面や角に足が触れてファウルをとられたこともあり、平常心を失い11m35の記録で9番目。ベスト8にも残れなかった。来年は絶対に全国大会で勝負できる将来性豊かな選手だけに、今回の失敗はそれはそれで意味があると考えている。引退試合となった3年生にはこの中学の競技生活で、自分の可能性の大きさを勝手に決めつけるのではなく、高校でもぜひ陸上競技を続けて、さらに大きな選手になることを心から願っています。

- 2年生が中心となって新しいチームをつくる時期になる。今大会、自分の出場種目がなくても2日間長居に通いづめて、積極的にチームのサポートをしたり、補助員の仕事をがんばったりする2年生部員が多くいた。新キャプテンの小森、小澤を中心に、これからの冬季練習を頑張ることで、また素晴らしいチームができるのではないかと期待している。真っ青な秋の空と、つるべ落としの夕暮れの景色を見ながら、今年も少しの淋しさと、大きな期待を抱く季節を迎えている。幸せな日々である。

